

解説 井上洋子・坂口博・松下博文
 本体揃価格 六五、〇〇〇円十税

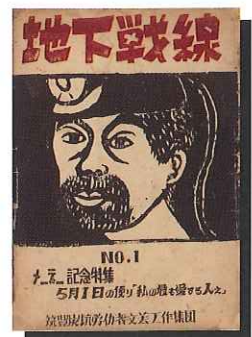
「異質な要素の対立相克」を交流の理念に掲げ
 戦後の市民運動に多大な影響を与えた、
 全九州・山口の〈サークル交流機関誌〉
待望の復刻!

復刻版

全三巻・附録一・別冊一

サークル村

不二出版



復刻にあたって

政治の季節であった。安保改定阻止国民会議が結成され、三池争議が始まった一九五八年。この年の九月に『サークル村』は発刊された。
本誌は九州全県と山口県の地域や職場のサークル相互の交流と連帯を目的として刊行された（『サークル交流誌』）である。

発行主体は九州サークル研究会。事務局所在地は現在の福岡県中間市。創刊時の編集委員は上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巖、谷川雁、田村和雅、花田克己、森一作、森崎和江。参加した会員は数十のサークルに所属する二〇〇余名であった。

創刊号には、「さらに深く集団の意味を」と題された巻頭の「創刊宣言」、以下、詩、生活記録、評論、短歌、創作、「毒舌」、「内政干渉」、「往復書簡」、「消息・案内」が掲載されている。

敗戦直後から全国で展開され、一九五五年頃が全盛期といわれる無数のサークル運動はそのまま集団の戦後思想史を形成する。精神の共同体であるサークルが果たした役割とは何か。異質なサークル間での交流はいかに可能であったのか。小社では一九五九年に模索された（『全国サークル交流誌』）の提案と計画案作成に大きな衝撃を与えた本誌を関連の三誌（『労働藝術』『炭鉱長屋』『地下戦線』）と併せて復刻刊行する。

この運動の火付け役である谷川雁や上野英信だけではなく、サークル村に集った金属工や坑夫、郵便局員、鉄道員、紡績女工、教員、技術員、店員、インタン、事務員、村の若者や主婦、その他もろもろの人々の声に耳をすませたい。

不二出版



1959年7月24～26日の阿蘇集会（第2回総会）にて [写真提供=加藤重一氏]

サークル村

創刊宣言

さらに深く集団の意味を

一つの村を作るのだと私たちは宣言する。奇妙な村にはちがいない。薩摩のかつお船から長州のまきぐらに至る日本最大の村である。九州山口八県のサークル活動家がすでに住民登録台帳に姿をあらわしている。もうひとつ忘れてならないのは私たちの「沖繩県」であるが、残念ながらそれはまだである。登録者の数はこれからであり、日々ふえている。その一人一人はそれぞれの単位で大切な動きを起している。村は近い将来ははたにぎやかになるだろう。一年間千名の人口。それが仮役場の仮書記が眼鏡ではじいた推定数である。もとより、東京を九万人の村だと考えている私たちに比べて、上水道と糞尿処理に計画性をもたない人口増加が危険なこととは熟知している。けれども、全九州の数十のサークルに所属するメンバーが一つの雑誌を軸としてあつまるという事実が、そ

れだけでもかたつてない現象である。それに加えて、村のなかに県があるという逆説を、私たちが村と発言するときのまじくふるえる心もとも向きあわせるならば、故郷のサークル運動がやつのようない場所をみつけたらどうかを本座にあらわしてもよいだろう。平凡な発想ではあるが、この裏には中途でくじけたり、むだ花に終ったりしたほう大なエネルギーがかかっている。たとえば福岡県水巻町の日炭高松炭鉱では昭和二十二年から今日まで実に十三種のちがった名前をもつ文学サークル機関誌が発行されてきた。この努力のなかに数えきれないほどの誤りとはぼ同じ量の血がふくまれている。今日のサークルが昨日の工作者の血を吸って育っていることは記憶されてよい。



● 内容見本

『サークル村』創刊号より

上は「創刊宣言」

下は「創刊号目次」

（復刻版は原誌と同じ A5 判）

表紙版画	千田 梅二
創刊宣言	
工場の乳房	＜カヴェ 杭
視力	＜
詩 或る物語	＜原
高学年	＜北九州
針と糸	＜北九州
生活記録「水のなかの顔」	
毒舌	
ネガチブスキ	今村 尚夫…(8)
破産宣告	花田 克己…(8)
杵島よいとこ	田中 巖…(8)
悠長派のハギシリ	三隅 男治…(9)
うたごえの四つの層	神谷 国善…(22)
内政干渉 (山田文学より杭へ)	木村日出夫…(25)
往復書簡 (農村一八幡製鉄)	佐々・千々和…(30)
短歌	
荷 重	沖田 活美…(20)
棹の下にて	山本 詞…(21)
詩	
太陽に沸く河	森崎 和枝…(26)
太陽と娘つこたち	金丸 耕…(29)
飛ぶ赤い章魚	山田 かん…(32)
夜の鏡	大島 寿二…(33)
鱧	千喜田春夫…(35)
蛮 人	谷川 雁…(37)
黒 い 朝	上野英之進…(42)
消息・案内	(表紙裏)

サークル村 創刊号 目次



なぜ『サークル村』なのか？

有馬 学（九州大学教授）

あまりにも頻繁に引かれた創刊宣言「さらに深く集団の意味を」は、作り出そうとする村を、「薩南のかつお船から長州のまきやぐらに至る日本最大の村である」と言い表した。それまでも、それ以後も、〈運動〉がこのように語られたことはなかったと思う。それは美しいが、しかしいま半世紀近い時を隔てて、「運動」が〈村〉をめざしたことの不思議さを、直ちには説明してくれない。

言葉の上で同時代の地平に降り立てば、村とは何かの説明はむしろ過剰なほどに与えられている。たとえば評論集『原点が存在する』の中で「さらに深く集団の意味を」となり置かれた、「東洋の村の入り口で」（一九五五年二月）を見ればよい。だが『サークル村』の宣言時において、「ア

ジアの諸民族と同じく」と形容しようような日本民衆の夢を宿す村とは、資本主義に破壊された破片でしかなかった。もしこんにち「サークル村」について考えるなら、六〇年安保に二年先がけて出現した集団的表現のネットワークをめざす試みが、村と名付けられたところにこそ、探求の出发点がおかれるべきであろう。

『サークル村』の言葉は鋭く尖っているが、拒絶してはいない。工作者でも何でもないわれわれは身の程をわきまえて、探求するという姿勢で『サークル村』の言葉の中に分け入ることである。それは戦後といわず、日本の近代を考えることと同義になると思う。

「村」は巨大な現実を照射する

池田浩士（京都精華大学教授）

かつて「村」は日本社会の縮図だった。一九三〇年代前半に猪俣津南雄が『窮乏の農村』に結実する農村調査を行なったとき、それは、「満蒙開拓団」という名の棄民と侵略戦争との産屋たる「村」の実相によって、日本という国家社会の歴史的现实を照射する作業となった。それから四半世紀ののち、まだ戦後民主主義が死にきつていなかった同じ国家社会のなかに、ひとつの人工的な「村」が建設されたとき、その「村」もまた、「黄金の六〇年代」の荒廃へと雪崩れ込んでいく巨大な現実を体現していたのである。

「サークル村」が筑豊と宇部とを自己の版図としたのは、もちろん、ここが最大の炭鉱地帯だったからだ。この一事が、「村」の誕生と存在と離散との歴史を充分すぎるほど説明し

ている。「石炭」は、当時なお、国家社会の文字通り動力源だった。だがそれはまさに使い捨てられようとしていた。石炭とともに人間が捨てられるのである。「サークル村」は、何よりも、これから捨てられようとする人間たちが巨大な現実と対峙する運動だったのだ。そして、「文化運動」の名に値する運動がみなそうであるように、政治と人間とが、組織と私とが、村のなかでせめぎあっていた。一人のカリスマがこの運動を領導していたのではない。「名もない」人間たちが、みずからの存在によってカリスマを撃ち、カリスマを撃つことで現実を撃った。ザラ紙に活字の凹みを残す『サークル村』の誌面からは、「村」とはじつはその日常と苦闘する一人ひとりの人間の声なのだという実相が、語りかけてくる。

屹立する知性の山脈

上野千鶴子（東京大学教授）

戦後日本には、『思想の科学』や『サークル村』のような集団的思考の場があった。

思想はひとりでは生まれない。多くの人々はヨーロッパの知的サロンにあらがれるが、サークル村はサロンというにはもっと土着的で、それよりもっと体温の熱い、そしてもっと命がけの知性と生き方のぶつかり合いの場だった。かれらはローカルでありながら、グローバルな射程で思想を紡いだ。運動と思想、そして主体ということばが、ひとの肉体を持ってたちあらわれる場だった。そのなかから、『原点が存在する』の谷川雁や、『追われゆく坑夫たち』の上野英信、『女と刀』の中村きい子、『からゆきさん』の

森崎和江、『苦海浄土』の石牟礼道子が次々に生まれた。目のくらむような知性の山脈だ。ひとりひとり屹立しながら、だがその集団の磁場を離れては存在しえなかった日本の知性である。ふりかえってみればその中には、フェミニズムやエコロジー、ディアスポラの思想やポストコロニアリズム、サバルタンやマルチチュードに至るまで、カタカナことばでもてはやされている今日の思想のすべてのルーツがしこまれていて。翻訳にまなぶ前に、わたしたちは自分たちの足もとの水脈を掘ればそれでよかったのだ。本誌を読むひとびとは、その鮮度と水準とに改めておどろくだろう。

「サークル村」復刻によせて

鶴見俊輔（哲学者）

谷川雁は、私にとって、まず伝説の人だった。一九四三年秋、学徒出陣のとき、内輪の席とは言え、彼は東大社会学部の同級生を前にして、「ドレイの言葉でも、何事かを語ろうではないか。イソップはドレイだった」と演説した。

このとき私は海軍軍属となってインドネシアに行っていたから、その場において自分の耳で聞いたわけではない。だが、つたえきいたとき、ここにひとりの詩人がいると

感じた。ここにひとりの詩人がいて軍国主義日本に対していた。

戦後に、実物の彼に会い、つきあいが生じたが、実物の彼も、伝説をうらぎる人ではなかった。

彼は、戦後の日本の知識人がふりまわされたソヴェト連邦の共産主義を奉勸する人ではなく、日本の伝統の現在にのこした遺産は村であると言ひ、彼なりにその信仰を実践して死んだ。

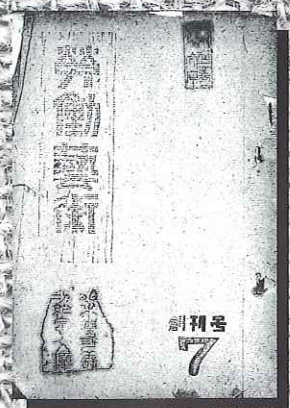
東京の編集者がその名を知らない中村きい子、森崎和江、石牟礼道子、三人の名を彼は架空の村の住人として私につたえた。同時代に目覚ましい活動をのこした人びとである。



附録

労働藝術
地下戦線
炭砒長屋

附録の三誌はいずれも日本炭
礦高松坑にて刊行された文芸
サークル誌である。
『労働藝術』は四八年七月
中心のメンバーは上野英信、
黒井修、川島正止。
『地下戦線』は五三年五月、
中心のメンバーは上野英信、
黒井修、早野輝雄。
『炭砒長屋』は五六年一月、
編集責任者は国上伸雄。



『労働藝術』表紙

炭坑長屋 一号 目次

読者と書き手のみなさんへ……………2
あれからもう一年が来た……………3
昔の日記から……………5
父……………6
陥落地帯……………9
公民館俳句に就て……………8
高松文学創刊号の読後感……………10
詩……………7
俳句——基地附近……………7
石松 弄涯……………7
きよし・あが……………7
工藤 憲男……………10
石松 弄涯……………8
米倉 正盛……………9
渡部 良枝……………6
田田 地平……………5
平和まもる……………3

エがたい労働者作家
上野英信を救へ……………14
編集 部……………14

創作 自殺記事(一)……………16
遠藤百合雄……………16
ある日の午後……………山下 千代……………18

表紙板画 千田梅二 表紙 早野輝雄 あとがき



『炭砒長屋』表紙



『地下戦線』表紙

会 員 募 集

「文芸」は、労働者の集りです。
「文芸」の親睦をはかり、文芸の学習、作品の発表をなします。
会費は毎月十円です。
原則として、月一回雑誌を発行します。
会員には、雑誌を郵送します。
毎月第一、第三日曜日午後六時から、発行所の文芸学習会をいたします。
(会員以外の方も参加できます。)

原 稿 募 集

△ 生活綴り方
△ ルポルターージュ
△ 詩・短歌・俳句
△ 創作・評論
△ 日記・手紙
△ その他の文章

四角字詰原稿用紙に書いて下さい。
枚数に制限ありません。

△ 会員・読者に限らず、一般の方も作品を募集します。(毎月十日締切です)

● 内容見本
『炭砒長屋』第1号の目次(復刻版は原誌と同じB5判)

近刊図書案内

人民戦線 復刻版

全五巻・別冊一
人民戦線社発行／中西伊之助主宰
〔昭和二十年〜昭和二十四年刊〕
A5判・上製・総一、七〇〇頁
別冊Ⅱ解説・総目次・索引
解説Ⅱ勝村誠(立命館大学)
秦重雄(大阪府立成城高校)
揃定価Ⅱ六八、〇〇〇円＋税
刊行Ⅱ二〇〇六年一〇月
推薦Ⅱ高柳敏男・西田勝

夕刊新大阪 復刻版

全十巻・別冊一(全二回配本)
新大阪新聞社発行
〔昭和二十一年〜昭和二十四年までを復刻〕
A3判・上製・総約二、八三二頁
別冊Ⅱ解説・主要記事索引
解説Ⅱ浦西和彦(関西大学文学部教授)
揃定価Ⅱ三〇〇、〇〇〇円＋税
刊行Ⅱ二〇〇六年一〇月・二〇〇七年五月
推薦Ⅱ田辺聖子・谷沢永一
山内祥史・山本武利
原本提供Ⅱ兵庫県立図書館

関連図書案内

午前 全五巻・別冊一

南風書房発行／北川晃二編
〔昭和二十一年〜昭和二十四年刊〕
A5判・上製・総二、一〇四頁
別冊Ⅱ解説・回想・総目次・索引
解説Ⅱ狩野啓子・長野秀樹・深野治
揃定価Ⅱ九〇、〇〇〇円＋税
推薦Ⅱ大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5297-8

本誌は昭和二十一年福岡の南風書房が、北川晃二を編集長として刊行した商業文芸誌である。敗戦直後で東京が未だ完全に機能していなかったことなど、いくつかの条件が重なり、中央での出版ではなかったにもかかわらず、三島由紀夫、庄野潤三、中村真一郎、三好達治らにも作品発表の場を提供するなど、高い水準を保っていた。戦後直後の日本の状況をも伝える貴重資料。全二五号。

文化展望 全三巻・別冊一

三帆書房発行／大西巨人ほか編
〔昭和二十一年〜昭和二十三年刊〕
B4判並製・B5判上製・総六六六頁
別冊Ⅱ解説・総目次・索引
解説Ⅱ赤塚正幸・大西巨人・狩野啓子
揃定価Ⅱ二八、〇〇〇円＋税
推薦Ⅱ大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5304-4

『文化展望』は、敗戦直後の福岡で新しい文化への欲求の発露として昭和二十一年に発行された。その創刊号には太宰治の「十五年間」が掲載され、坂口安吾、野間宏なども作品を発表している。「この時代における新しいジエネレイションの役割をいつも念頭に置き、絶えず第一義を目指して努力する」ことを掲げ、戦後の新しい時代への第一歩を模索しその答えを発信している。全一三号。

鵬・ピオネ・藝術前衛 全三巻・別冊一

鵬同人社ほか発行／岡田芳彦・出海溪也ほか編
〔昭和二〇年〜昭和二十五年刊〕
菊判・上製・総八八六頁
別冊Ⅱ解説・総目次・索引
解説Ⅱ赤塚正幸・麻生久・出海溪也
揃定価Ⅱ三五、〇〇〇円＋税
推薦Ⅱ大西巨人・紅野敏郎
二〇〇四年六月刊 ISBN4-8350-5309-5

戦後という未知の時代を迎えるにあたり、自らの位置を詩によって築こうと集った若き詩人たちの軌跡を辿る資料。『鵬』(第六号から『FOU』に改題)〔昭和二〇年一〇月〜昭和二十四年九月(全一七号)〕発行Ⅱ鵬同人社(北九州八幡) 編集人Ⅱ岡田芳彦／『ピオネ』〔昭和二十四年三月〜同年六月(全三号)〕発行Ⅱ詩郷社 編集人Ⅱ出海溪也／『藝術前衛』(『鵬』『ピオネ』の合併改題誌)〔昭和二十五年二月〜二月(全三号)〕発行Ⅱ日本前衛詩集『世界前衛詩集』 編集人Ⅱ出海溪也

サークル村

復刻版 全三巻 + 附録一 + 別冊一

収録内容

第一巻 『サークル村』【第一期】一九五八年九月～一九五九年六月

(二巻一号～二巻六号) A5判 五二〇頁

第二巻 『サークル村』【第二期】一九五九年七月～一九六〇年五月

(二巻七号～三巻五号) A5判 五四〇頁

第三巻 『サークル村』【第三期】一九六〇年九月～一九六二年一〇月

(三巻六号～四巻六号) B5判 三二六頁

◎ 附録 B5判・五二六頁

『労働藝術』 一九四八年七月 (創刊号)

『地下戦線』 一九五三年五月～一九五四年三月 (一号～五号)

『炭砒長屋』 一九五六年一月～一九五六年五月 (一号～五号)

体裁—— A5判・B5判 / 上製 / 約一、九一二頁

別冊—— 解説・回想・総目次・執筆者索引

別冊のみ分売可 || 本体価格一、〇〇〇円 + 税

ISBN4-8350-5720-1

解説—— 井上洋子 (福岡国際大学)

坂口 博 (創言社)

松下博文 (筑紫女学園大学)

回想—— 上田 博・加藤重一・河野信子・小日向哲也

原本提供—— 坂口 博・松下博文

刊行—— 二〇〇六年六月一 一括刊行

定価—— 本体六五、〇〇〇円 + 税 ISBN4-8350-5715-5

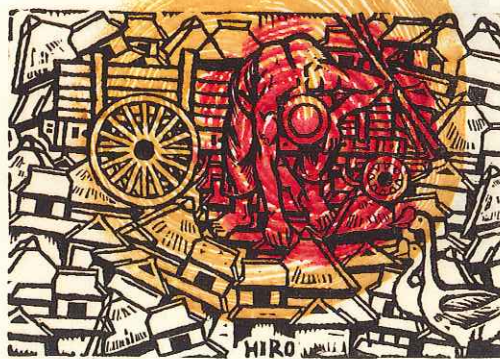
推薦—— 有馬学 (九州大学)・池田浩士 (京都精華大学)

上野千鶴子 (東京大学)・鶴見俊輔 (哲学者)

世界をよせ

まぶな腫れものまぶなかぞ
馬車のかたをたうらみはる
桶屋がくる桶屋のまぶの
おそろし価値をまぶ派をま
なめしと走るおとすの意匠を
やさしい敵もたべてしまえ
青空から煉瓦がふるとき
ほふるものだけが出石隊長お

詩 谷川 雁



不二出版

〒 113-0023

東京都文京区向丘 1-2-12

電話 03-3812-4433

ファクシミリ 03-3812-4464

振替 00160-2-94084

*表示価格はすべて税別

サークル村 第1巻第2号の目次頁の原画 [原画提供=上田博氏]